

《巻頭言》

新たな展開

高木まさき

1. 横浜国立大学学術情報リポジトリから

本年度は、新たな多くのことの始まりの年となりました。

まず些細なことではありますが、会員のご理解を得て、本誌『横浜国大言語教育研究』が本号より横浜国立大学学術情報リポジトリ（横浜国立大学の教育研究活動において生産された学術情報を収集し、電子的な形で蓄積・保存し、インターネット上に無料で公開するもの）による配信となったことです。経費削減の事情もありますが、執筆者の研究成果をより多くの方に見ていただくためには、やはりインターネットを経由して提示できることの意義は大きいと思います。また執筆者も、誰の目に触れるか分からない以上、より慎重に論を固めることが求められるはずですから、その意味でも、教育効果が高いと言えるかもしれません。

2. 教育学部回帰、教職大学院設置へ

また次年度になりますが、とは申せ、この4月（2017年）のことですが、教育人間科学部が教育学部に戻り、かつまた大学院教育学研究科内に、高度教職実践専攻、いわゆる教職大学院を開設するなど、本学部・大学院が教員養成に特化し、機能強化することを鮮明にいたします。私も、教職大学院の所属となり、国語教育のみ担当という立場ではなくなります。3月5日に教職大学院開設記念フォーラムを開催し、前兵庫教育大学長・前日本教職大学院協会会長であられた加治佐哲也先生に基調講演をお願いしましたが、地域により事情は異なるが、大きな方向性として、国立大学の教員養成学部の縮小・廃止、大学院では従来の修士課程の廃止、教職大学院に特化することなどの国の方針の説明がありました。これは、恐らく戦後の国立大学における教員養成の最大の転換点になるものと思われます。

3. グローバル化社会への抵抗

こうしたこととは無関係のようにも見えますが、英国のEU離脱、米国のトランプ大統領の誕生なども、今年度の大きな話題でした。どちらも加速するグローバル化社会への抵抗と見る事ができると思いますが、普通の人にとって、グローバル化、そのスピード感は、行き過ぎたものと映るのかもしれない。とはいえ、近く告示予定（3月とされる）の新しい学習指導要領は、こうしたグローバル化社会にあっても、あるいは、AI、IoTに囲まれた社会にあっても、人々が人として生き抜いていけるよう検討を重ねられたものとなっています。教職大学院は、そうした社会に望まれて誕生してきたもののひとつと言えるように思います。

4. 「思考力・判断力・表現力」を問い直す

しかしながら、こうした風潮、論調には本当にそういう社会であって良いのか、という問いはあまり見られず、急激に変化する社会の動きにいかに取り残されずについて行くか、という方法論ばかりが目立つようにも思います。

エマニュエル・トッド、ハジュン・チャン、柴山桂太、中野剛志、藤井聡、堀茂樹著『グローバルリズムが世界を滅ぼす』（文春文庫2014）において、藤井氏は、そうした社会状況と個人の関係を、ハンナ・アーレントが描き出したアイヒマンと全体主義の関係に重ね合わせているのが示唆的です。それはどこか、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハートによる『〈帝国〉』（以文社2003）が描き出している世界とも通じているようにも思われます。

私たちは、今こそ、こうした大きな潮流に立ち止まって、真に「思考力・判断力・表現力」を働かせるとはどういうことを問い直す必要があるように思われます。

(横浜国立大学)